

アルタイにおける製鉄遺跡の発掘調査成果とその意義
村上恭通（愛媛大学教授）

アウラガ遺跡の発掘調査を契機として、モンゴル帝国と鉄・鉄器生産との関係が注目されるようになり、遊牧社会と鉄の関係史はモンゴル考古学において重要な課題となった。

アルタイ地方はロシア・ゴルノアルタイ側ではパジリク文化、モンゴル側ではチャンドマニ=サギル文化以降、鉄製品が多用されるようになり、これらの素材獲得の様相を解明する必要がある。そのために2017年よりオブス、バヤン・ウルギー、ホブドの各県内を踏査し、複数の鉄滓散布地を確認し、さらに製鉄炉の存在を確認した。とくにオブス県ではグング遺跡、ボルゴチュードゥ遺跡、ツァガーン・モリト遺跡をはじめとして数多くの製鉄炉を確認した。広い河岸段丘に位置するグング遺跡では匈奴から柔然にいたる製鉄炉を発掘した。地面を掘って炉体を作るこれらの製鉄炉は基本的な構造を共有し、規模や形態に変化が見られる。ボルゴチュードゥ遺跡は険しい山中に位置し、製鉄炉は板石を組み合わせて構築されている。その時代は突厥に相当する。ツァガーン・モリト遺跡も山中にあり、突厥以前の遺跡では経験したことのない大規模なスラグ廃棄場、鉄鉱石破碎場を伴う。製鉄炉は破壊されてはいたものの粘土で築かれた舟形を呈し、両側縁に複数の送風孔を穿っており、ユーラシア大陸に類を見ない。その時代はウイグル時代である。

以上のようにアルタイ地方の製鉄は匈奴から柔然までは基本形を維持しながら発達し、突厥、ウイグルと技術革新を経たことがわかった。